

K O B E
O J I Z O O

はばたき

March 1997 No.40

神戸市立王子動物園 第40号



ごあいさつ



財神戸市公園緑化協会
理事長 [神戸市助役]

山下彰啓

王子動物園機関誌「はばたき」第40号をお届けいたします。

この「はばたき」は、王子動物園で飼育している動物園の様子や出来事、動物に関するいろいろな情報を市民の皆様に提供し、動物に対する知識や興味を持つていただくとともに、動物愛護精神の啓発に役立てていただければと、昭和49年3月に創刊いたしました。幸いにも多くの皆様方にご好評をいただき、回を重ねて第40号を発行するに至りました。この間各方面から寄せられたご意見等に厚くお礼申しあげます。

さて、この「はばたき」は、創刊以来王子動物園の職員が自ら企画編集し、(財)神戸王子動物園協会が発行してまいりましたが、昨年4月に(財)神戸王子動物園協会と(財)神戸市公園緑化協会が合併しましたので、本誌の発行も当協会が引き継ぐことになりました。発行者は変わりましたが、従来にも増して皆様に親しまれる「はばたき」作りに努力してまいりたいと考えております。

神戸の街を一瞬にして破壊した阪神・淡路大震災の発生から丸2年が経過しました。街づくりは復旧から復興へと確実に歩を進めておりますが、被災された市民の中にはいまだに不自由な生活を余儀なくされておられる方々もおられます。

当協会をいたしましても、動物園や公園が市民の皆様方にとって心のやすらぎの場となりますよう、一層の努力をしてまいりたいと考えておりますので、ご支援の程よろしくお願い申しあげまして、ごあいさつといたします。

K O B E OJI ZOO

はばたき No.40 March 1997

●今月の特集●

姉妹都市リガ市との動物交流&シタツンガの人工ほぐ

昨年9月3日、リガ市から被災した神戸に贈られた子ゾウ「ズゼ」が来園し、そのお礼に動物たちを贈るなどの国際的な動物交流を行いました。

新しく仲間入りした動物、シタツンガの人工ほぐ、動物園の行事などのほか、今年3月に開館10周年を迎える動物科学資料館も紹介します。

CONTENTS 目次 (敬称略)

表紙 「メガネカイマン」

写真：川上博司

P11～P12. 新しく仲間入りした動物たち

文・写真：兼光秀泰、芦田雅尚、石川康司
インドゾウ、ダチョウの来園、アムールヒョウやグレービーシマウマの赤ちゃん誕生など新しい仲間をお知らせします。仲良くしてね。

P1. 卷頭言

ごあいさつ

(財) 神戸市公園緑化協会 理事長(神戸市
助役) 山下彰啓

P13～P14. アマチュア動物写真コンクール

文：古川淳夫
特別賞作品7点を紹介。迫力ある写真をご覧ください。

P2. 「オオコノハズク」かわいい!

文・写真：岸田一也

P15. 動物そだん室

「イグアナのしっぽは生えかわるの？」
文：浜夏樹

ZOOっとタイムズ No.6 今回はウシが登場！ 画：川上博司

P3～P4.

特集I：姉妹都市リガとの動物交流
「ラトビア共和国リガ動物園を訪問して」

文・写真：権藤真穎

ラトビア共和国ってどこにあるの？子ゾウの
ズゼを贈ってもらったお礼に動物たちを連れ
て行ってきた報告です。

P16. 動物科学資料館10周年

文：安宅範子、写真：谷岡正之

この10年間の思い出を綴りました。

P5～P6.

特集II：姉妹都市リガとの動物交流

子ゾウ「ズゼ」の来園

文：石川康司、瀧田正男

写真：石川康司、中林茂難、古川淳夫

11,600kmを10日間かけて平成8年9月3日、
到着。国内最高齢の「諏訪子」、オスの「マック」
の3頭との奮闘記。賑やかになりました
が、それぞれの性格があつて大変です。

P17～P18. トピックス

動物園のイベント

文・写真：末原 譲

こんな行事もやっています。気軽に参加して
ください。待っています。

うし年賀状版画コンクール

文：末原 譲

入賞作品7点を掲載。力作揃いで、選考も大
変とうれしい悲鳴です。皆さんも応募してね。

編集後記

文：瀧田政男

裏表紙

表紙動物の解説とメガネカイマンの卵（実物
大）です。

文・写真：川上博司

オオコノハズク

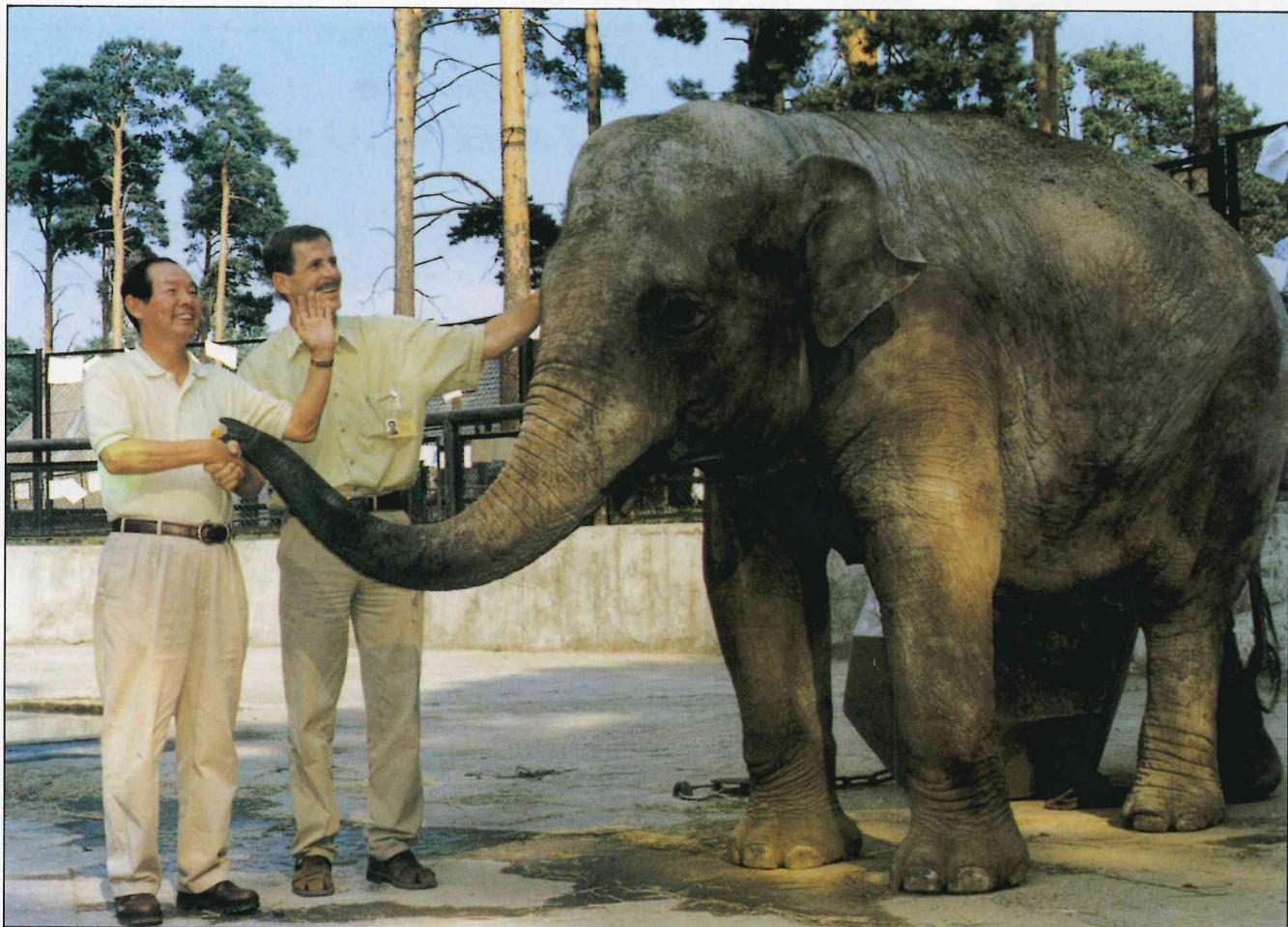
Otus bakkamoena
Collared Scops Owl

日本産のフクロウ類の中で最も小
さいコノハズクより少し大きく、全
長約25cmで、ヒヨドリぐらいの大き
さ。目の虹彩はオレンジ色で、足指
の先まで羽毛がある。

繁殖期には標高500～1000mのや
や高い山林で生活するが、秋から冬
にかけては平地に降り、人家の近く
に生息する。夜行性で音をたてずに
ヒラヒラと飛び、小鳥、ネズミ、昆
虫などを捕まえて食べる。留鳥で六
甲山系にもいるが、保護色と夜行性
のため観察は難しい。ウォッ、
ウォッ、ウォッと低い声で3回続け
て鳴く。

特集 I 姉妹都市リガとの動物交流

● ラトビア共和国 リガ動物園を訪問して ●



ズゼちゃんにあいさつする権藤・王子動物園長(左)とグレイジンス・リガ動物園長(リガ動物園にて)

昨年の10月18日に動物護送とリガ動物園での贈呈式に出席するため、市田清弘・神戸市建設局長と二人でリガ市を訪問しました。

当園から贈呈した動物はニホンザル4頭、アカコンゴウインコ2羽とショウジョウトキ8羽です。リガ動物園との動物交流の歴史はもう20年になります。1980年にビーバーをいただいたのが始まりで、1986年にはカワウソがやってきました。王子動物園からは1982年にニホンザル、1986年にリスザル10頭を贈呈しております。そのほか、リガ動物園の開園80周年記念行事に様々な文献や映像資料を提供しておりますし、リガ市民の神戸訪問のたびに当園にお招きしているなど、人的な交流も盛んです。

今回の訪問は昨年の9月にリガ動物園からメスの子ゾウの贈呈を受けましたので、その返礼が大きな目的でした。

地震の後のまだ市民の日常生活が大変な時期の3月24日にスイスから3歳の雄ゾウの「マック君」が関西国際空港に到着しました。このマック君の将来の花嫁にと、タイ国から輿入れする予定だった子ゾウが来れなくなり、再度候補を探し始めました。幸運にもリガ動物園生まれの

ズゼちゃん(6歳)を、震災で困難な状況にある神戸の子どもたちを勇気づけるために贈呈していただくことが両市長との話し合いで決まったのです。リガ市から神戸市まで直線距離で1万キロもあり、トラック、フェリー、ボートに乗り継ぎドイツのフランクフルトから飛行機で新東京国際空港(成田)まで空輸。そこから、夜通しトラックで神戸へ。10日間もかけてやってきました。

ズゼちゃんには花嫁の持参金として書かれた嫁入り道具



レセプションでの市田・建設局長(左端)とリガ市の代表ら

箱が一緒に到着しました。この箱の中には、リガの子どもたちの手作りのゾウの人形や絵や手紙がどっさり入っていました。

ズゼちゃんは生まれて3ヵ月後に母親に死に別れ、人工ほ育で育ちました。この母親はロシアのモスクワ動物園から借りていました。それで、死んだ母親の代わりにズゼちゃんをモスクワに返さなくてはならなかったのですが、ズゼちゃんと別れたくないリガ市民と子どもたちの願いで寄付金を集め、モスクワにその金を渡して、ズゼちゃんはリガで暮らせるようになった経緯があります。

遠い極東の国に行くのは可哀想だとか、リガにずっといてほしいなどのリガ市民からの強い声がありました。グレイジンス園長の説得や当園から送ったマックや王子動物園の紹介ビデオがテレビに放映されて、市民の合意が得ら

神戸市動物愛護協会・フラワーソサエティー・神戸市獣医師会・動物福祉協会阪神支部・神戸リガ友好委員会の皆さまからいただいた150万円の寄付金を結納金として持参することができました。

ご協力をいただきました多くの方々にお礼を申し上げます。

ズゼちゃんが日本に行き、リガ動物園には、父親のゾウ1頭しかいなくなったので、新しい花嫁が必要となっていました。そこで、ゾウの繁殖が続いている海を隔てたデンマークのコペンハーゲン動物園から20歳の雌が動物交換で来ることになりました(後日、私たちの結納金はコペンハーゲンからの輸送費に充てられたとのお礼のファックスが届きました)。これで、将来お互いの動物園でゾウの繁殖に努めることができます。遠く離れた国どうしでありますが、両園とも市民の皆さまの温かい気持ちに支えられて存続できるのだなと、実感しております。

リガ動物園での贈呈式には多くの市民の大歓迎を受けました。この4月～5月には第2陣の贈呈動物、タンチョウとワオキツネザルを贈ります。リガ動物園が日本の特別天然記念物をこれからどんどん繁殖させて、リガの子どもたちを喜ばせていただきたいし、ヨーロッパの各地の動物園へのタンチョウの供給動物園として頑張ってほしいと願っています。



ズゼちゃんとお別れするリガ市民(金網に貼られている紙は子どもたちの手紙や絵で、神戸に送られてきました。)

れたのです。

リガ動物園は郊外の湖に面した松林の中にあり、面積は王子動物園の2倍の16ヘクタールもあり、北欧の美しい風景の中に溶け込んだ優雅なたたずまいを持っています。展示動物は哺乳類110種484点、鳥類115種736点、爬虫類56種182点、両生類27種228点、魚類89種603点、合計397種2233点と王子の2倍の種類と動物たちが飼育されています。ラトビア共和国は人口400万人、面積は日本の四国くらいの小さな国で、首都は人口約80万人のリガ市です。そして、動物園はリガ市にしかありません。ソ連の崩壊後、独立共和国となったのですが、いまだ経済的には大変な時期で、物価が高騰し、物があつても一般市民が買うことが難しい状況の中で、神戸にズゼちゃんを贈っていただいたのです。そういう状況の中で、市民から花嫁の持参金をいただいたのですから、私たちも感謝の気持ちを表したいと、日本の慣習にあります結納金を考え、動物園で募金活動を始めました。財団法人神戸市公園緑化協会が中心になり、園内に募金箱を置き、入園の皆さんに寄付金をいただいたり、



リガ動物園入口

特集 II 姉妹都市リガとの動物交流

●子ゾウ「ズゼ」の来園●



仲良く遊ぶ子ゾウ 2頭（写真 左：マック 右：ズゼ）

去年の9月、日本から遠く離れたラトビア共和国リガ動物園からアジアゾウがやってきました。名前は「ズゼ」。でもズゼは愛称で本名は「スザンナ」です。

まだ6歳だけど体は大きく、「マック」にとっては姉さん女房です。ズゼは生後3カ月のときにお母さんが死んでしまい、飼育係のサウエルさんたちに育てられました。あまり活発な性格ではないので、ちょっと太りぎみ。リガではみんなに大切に育てられたし、冬は寒すぎて外にも出なかつたので、仕方がないかも知れません。

ズゼの宝物はリガから持って来た木の丸太。いつも持ち歩き、不安になると丸太を持ったままジッと固まってしまいます。マックや諏訪子に丸太を取られると隙をみて取り返します。性格上、強引には奪えません。

ズゼは日本にきて初めて深いプールに入りました。今までは浅いプールしかなく、大きな体を沈めることができませんでした。夏の暑い日にはマックと一緒に狭いプールの中で押し合いながら横になります。そして、濡れてかゆくなった体を壁にこすりつけます。来園したときは地面にアカが見えるほど落ちました。

12月に新しい象舎が出来、ほんとうはマックを入れようとしていたのにズゼが一番乗りをしました。怖がりのはずのズゼが初めてに入ったので意外でした。一方、マックの方は全く入ろうとはせず、ズゼにとってはマックに追われたときの避難場所にもなっています。そんなズゼでもマックがいないと不安なときがあります。運動場に慣れるまでは一緒に出ていたマックが部屋に入ってしまうとズゼもす



幼稚園児も参加して、にぎやかに開かれたズゼちゃん歓迎式

ぐに後を追うように入っていました。

夜、横になって寝ているマックを蹴って起こすこともありました。

ズゼは見かけによらず怖がりで、日本に来たときは落ち着かず自分の唾液を体にかけていました。その時にマックがおしつこをすれば、そのおしつこを自分の体にかけていました。いつもと違う音を聞いたり、車を見ても怖がり走りだします。そして食べる量も減り下痢もしました。今は少し慣れたけど、この性格は直りそうにもありません。初めはエサもあり食べず、飼育係員から手渡しでエサをもらっていました。今ではエサをもらおうと鼻を上げ、その鼻を飼育係の頭や肩に載せてきます。調教も始まったばかりで、ズゼ本人は何をされているのか分からぬと思いません。でも、飼育をするうえで必要なことなので、ズゼ本人にも頑張ってもらおうと思っています。



ズゼの来園を知らせる入口のお知らせ



雪でも元気！ ズセとマック

リガ市からは大変貴重なインドゾウの子ゾウ（ズゼ、メス、6歳）をいただいたお礼に、神戸市からは次の5種類23点の動物を贈呈することにしましたが、リガ動物園の都合で2回に分けて輸送することになりました。

◆第1陣（平成8年10月15日輸送）

- ①ニホンザル 4頭（オス1、メス3）
 - ②ショウジョウトキ 8羽
 - ③アカコンゴウインコ 2羽（オス2、メス2）
- ◆第2陣（平成9年4～5月ごろ輸送予定）
- ④タンチョウ 6羽（オス3、メス3）
 - ⑤ワオキツネザル 3頭（オス1、メス2）

今回の子ゾウ輸送は、子どもといつても体重が約2,300kgもありますし、航空便や添乗飼育員の問題があって、すんなりとはいきませんでした。ワシン

リガ市への動物贈呈

トン条約の手続き以外にも、いろんな問題が次から次へと発生しました。そのたびにFAXなどでやり取りするのですが、お国事情、考え方の相違や時差等もあって解決するのに時間がかかりました。

何とかうまく話し合いがついたらと思ったら途中の経由する国での手続きや書類提出などで問題発生。間近になってからは乗せることができる航空便は新東京国際空港（成田）着しかないことがわかり、成田から陸送することとなったりと、ギリギリまで本当に大丈夫かという不安が消えませんでした。

こちらから贈る動物たちについても、同様のことが発生しましたが、何とか第1陣は無事輸送することができました。第2陣はもっとスムーズにしたいと願っているところです。動物たちのためにも……。

特集III 飼育トピックス

● シタツンガの人工ほ育 ●



人工ほ育中のシタツンガの赤ちゃん(生後60日ごろ)

シタツンガというものはウシ科の動物で、アフリカ中部の沼地または森林に生息しています。

当園では1995年7月25日に姫路セントラルパークからクライ(雄)とサツキ(雌)の2頭が搬入され飼育を始めました。

1996年5月8日、待ち望んだベビー(♂)が誕生しました。出勤したときには、すでに生まれており、体も乾いていたので深夜に出産したものと思われます。悪いことにこの日

は朝から雨で、この仔は発見当初は室内にいたのですが、すぐに母親を追うように外に出てしまいました。母仔ともに室内に収容しようとしましたが、母親がそれを嫌い暴走し何度も柵に激突したため、しばらく静かにして様子を見るにしました。

午後5時、いまだに母仔の室内収容ができないとの子がカラスに攻撃される恐れがあるため、母親から分離し、人工ほ育に切り替えました。人工ほ育を行うに当って、シタツンガの人工ほ育を経験している姫路セントラルパークに連絡し、飼育環境や授乳量、成分の調整などを教えてもらいました。これによりミルクは森永のゴールデンドッグミルクを使用しました。授乳量は、1回当たり体重1kgにつき25ml、一日総授乳量は体重の12%、ミルク中の脂肪含量は5%としました(授乳回数及び量は表1に示す)。この時期は、まだ朝晩が冷え込むため、暖房施設が必要だったので、赤外線暖房、床暖房が完備されているオオアリクイ舎の空部屋で飼育することにしました。

初日の授乳は、母親から分離されたショックや哺乳瓶になれていないこともあるのか、吸引も弱く午後5時30分に40cc、午後10時に60ccしか

飲みませんでした。翌日からは、授乳時間を6:00、10:00、14:00、18:00、22:00の1日5回としました。2日目の最初の授乳では昨夜同様、吸引も弱く、時間をかけて35cc飲ませるのがやっとでした。体重も出生時4キログラムあったのが3.75キログラムに減少していたため、慌てて授乳方法なども検討しましたが、2回目からは力強く吸引し全量をあっという間に飲み干してくれました。その後も授乳は順調で、暖かい昼間には屋外に出して日光浴をさ

せるようになりました。しかし、4日目からひどい下痢で尻の周りがいつでも汚れている状態になったため、授乳に加え尻拭きが私たちの日課となりました。下痢を抑える意味でミルク濃度を下げるのと整腸剤をミルクに混ぜて与えるようにしました。これでも、なかなか下痢は治まらず、ときたま便に血が混ざることもありました。体重も出生時の4kgのままで、元気に育ってくれるのか心配でした（図1）。5月20日、やっと下痢も治まり、これに伴って体重も増加し始めました。ほっとした矢先、今度は排便がみられなくなりました。便秘を疑い、肛門をマッサージして排便を促しましたが、全くその気配はありませんでした。腹も張っているように見えず、元気で全く苦しそうな状態でもなかったので、数日様子を見ることにしました。それから3日のこと、授乳に訪れたとき自分の排泄物を食べているのを発見しました。ということは、今まで自分の糞をすべて食べていたのです。これは10日ほど続き、その後は、毎日床に黒い丸い糞が多数落ちているようになりました。

6月7日、初めて青草を少量食べました。ミルク以外の固形物を食べたのはこれが初めてのことでした。その後、キャベツやニンジンも少しずつ食べるようになりました。この頃に授乳回数を1日4回に減らしました。7月13日に

は堅い草食動物用配合飼料を初めて食べました。これに味をしめたのか翌日からは給与分すべて食べるようになりました。これで親に与えている飼料を全て食べるようになつたので、7月16日をもって離乳させることにしました。

日増しに大きくなり、寝室から屋外に出るのが窮屈になってきたので、9月1日にオオアリクイ舍からダチョウ舍横の空き施設へ移動しました。

12月初旬には頭のてっぺんに小さな角ができていました。今では、約4センチにもなり徐々に雄らしくなってきました。しかし、甘えん坊で今でも乳首が恋しいのか、人の手を吸いたがっています。

当園では、草食動物の人工授乳の経験が少なく当初は慌てていたのですが、姫路セントラルパークに問い合わせたところ、資料提供やアドバイスをいただき、ほとんど同じ方法をとった結果、何の心配もなく順調に生育してくれました。

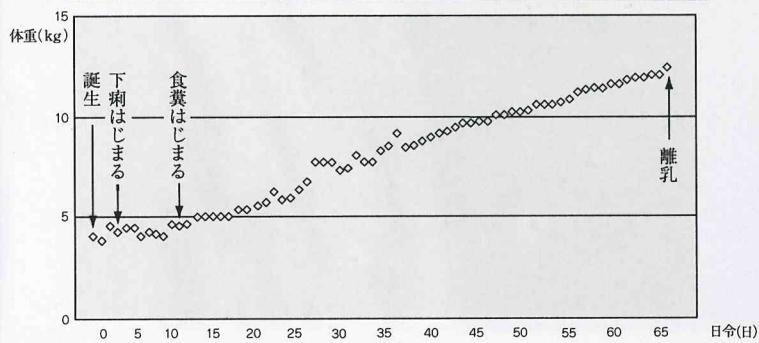
ここまで成長したのは姫路セントラルパークの皆様のおかげです。ほんとうにありがとうございました。

なお、今年2月9日にもオスの赤ちゃんができました。今回は母乳で育ち、とても元気に走りまわっています。

表1. 日令別の授乳量、授乳回数、体重

日 令	授乳回数	1回当たりの授乳量(mL)	1日当たりの総授乳量(mL)	体 重
1～30	5	90～160	450～800	3.7～8.0
31～40	4	200	800	8.0～5.6
41～52	3	220	660	8.8～10.3
53～60	2	250	500	10.6～11.3
61～70	1	250	250	11.3～12.4

図1. シタツンガの成長



ミルクを飲むシタツンガの赤ちゃん



クマタカ

Spizaetus nipalensis

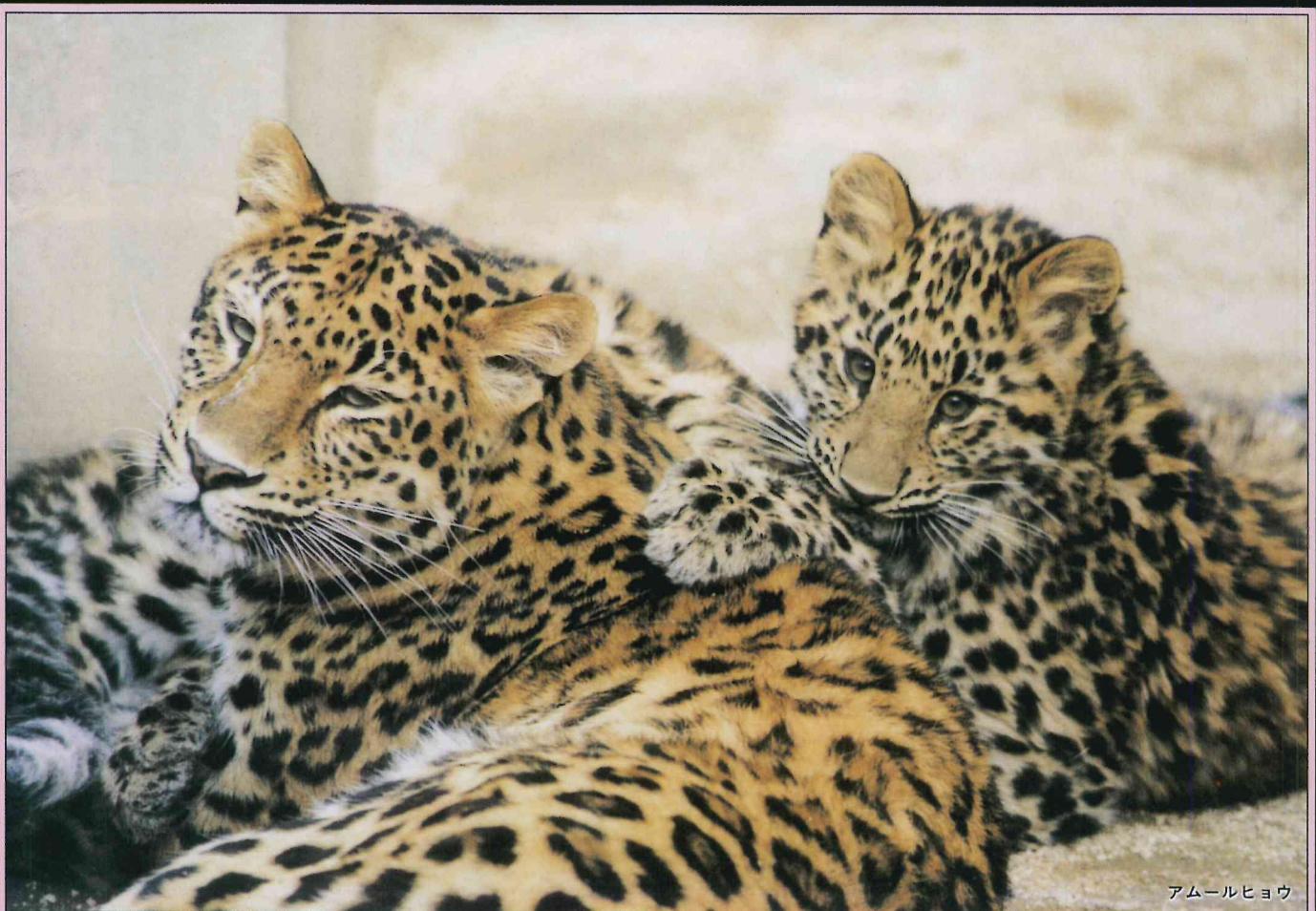
Mountain Hawk Eagle

特殊鳥類に指定され、捕獲は禁止されている。全長70~80cm、翼開長140~165cmでカラスより一回り大きく、メスの方が大きい。尾は長く、数本ある幅広い黒帯が識別にも役立つ。後頭部の羽毛は少し長く冠羽状になっている。



キジ、ヤマドリ、ライチョウなどの鳥類を主食とするが、ウサギ、キツネ、ニワトリ等も食べることがある。高い樹木の上に小枝を積み重ねて大きな巣をつくり、灰白色の卵を1~2個産む。抱卵日数は40日前後といわれている。ピッピッピッピューッと鋭く鳴く。留鳥として日本全国に生息している。

新しく仲間入りした動物たち





子ゾウ「ズゼ」

アムールヒョウに双子の赤ちゃん誕生

昨年8月30日に、アムールヒョウの仔が2頭生まれました。2頭とも女の子（♀）で、産まれたときの体重は850gと950gの大きめの仔でした。

1カ月半ほどで、親と同じもの（肉）を食べるようになり、今では、かなり大きくなって、活発に遊んでいます。午前中はお母さんと一緒にグラウンドに出ていますので、見に来てくださいね。

グレビーシマウマの赤ちゃん誕生

グレビーシマウマは、エチオピアやケニア北部などの乾燥した草原に住む、縞模様の細かい大型のシマウマです。

昨年11月26日に赤ちゃんが生まれました。性別はメスで、大変元気よく順調に成育しています。父親はニルス、母親はナナ。ともに姫路セントラルパークからブリーディングローン（繁殖のための貸借）でやってきた個体です。1992年からこの2頭と一緒に飼育してきましたが、なかなか子どもに恵まれず、5年目にしてやっと繁殖しました。

当園では10年ぶり18頭目の子どもです。

子ゾウの来園

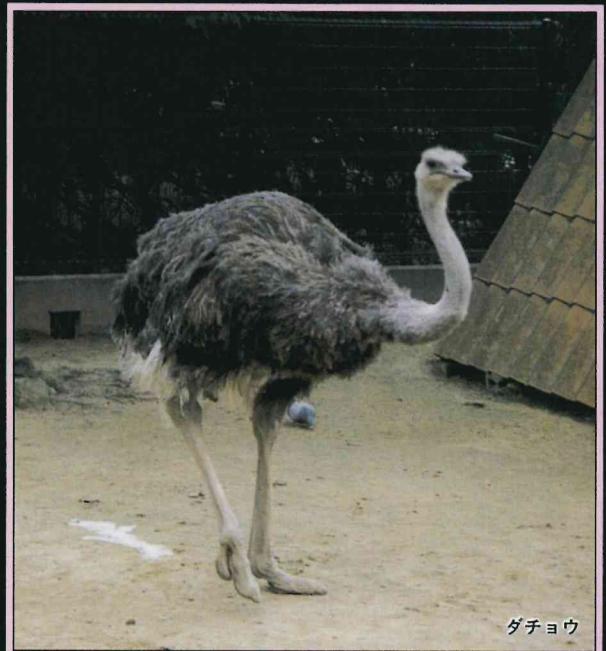
昨年9月3日、姉妹都市ラトビア共和国リガ動物園からメスの「ズゼちゃん」がやってきました。

オスの子ゾウ「マックくん」の花嫁候補です。

くわしくは特集（3～6頁）をご覧ください。

ダチョウのメス来園

昨年6月12日に雌が死亡し、雄1頭だけを飼育していましたが、10月12日に沖縄こどもの国から雌をいただき、やっとペアで飼育できるようになりました。雌はまだ若いので繁殖はまだ先のことになるでしょう。



ダチョウ

第8回 アマチュア動物写真コンクール入賞作品



神戸市長賞 「なかよし」 山崎 貞男さん

園内の動物をテーマにした平成8年度のアマチュア動物写真コンクールを開催しました。今回は416点の応募があり、動物写真家の田中光常先生の審査により、特別賞7点、入選・佳作15点を選び、動物科学資料館で展示しました。また、9月22日には表彰式を行いました。ここでは特別賞の7作品をご紹介します。



王子動物園長賞 「ゾウが座っている」 服部 美智男さん



神戸市動物愛護協会長賞 「可愛いいね」 井元 武司さん



神戸市公園緑化協会賞 「恋の季節」 高杉 寛さん

サンテレビジョン賞 「良い顔」 村上 誠さん



フジフィルム賞 「白フクロウ」 上田 利幸さん



神戸新聞社賞 「ふれあい」 池野 明さん

動物そだん室 なぜ? どうして?



しつぽ
イグアナの尻尾は生えかわるか?



A 先日イグアナを飼っている知人から質問を受けました。「イグアナの尻尾が切れてしまったんだけどトカゲのように生えかわるのだろうか」と。

トカゲの尻尾が再生することは誰でも知っている事実です。私自身、子どもの頃トカゲを捕まえようとして尻尾をつかんだ瞬間、自ら尻尾を切って逃げて行くのを見て、「どうせまた生えるんだ」と、その後ろ姿を眺めていたことを思い出します。トカゲのこの行動を「自切」といい、一種の防衛行動です。尻尾の自切が起こる部位は決まっています。そして完全(?)に生え替わります。「?」をつけたのは必ずしも元どおりになるとは限らず、以前より骨(尾骨)の数が少なくなったりすることもあるからです。しかし、立派に再生します。

再生は動物で日常的に起こっている現象です。ヒトが体をこすると出てくる垢は皮膚の細胞が角質化し脱落したものです。垢が落ちても皮膚が存在するのはすでに新しい細胞が再生しているからです。また腸の上皮細胞も再生が何度も繰り返されている細胞です。再生は生物の最も基本的な性質の一つだといえます。しかし、再生現象は構造が複雑になればなるほど起こりにくくなります。つまり、高等動物ほど再生は起こりにくくなるのです。扁形動物のプラナリアは体全体に再生機能をもちますが、ヒトのような高等動物では器官の一部や臓器が再生するだけです。ときに、四肢の再生も起こります。薬指の爪から先を失った老人の指が再生した例があるそうです。

私の知人が飼っているイグアナの尻尾がその後どうなったかは知りませんが、生物の再生能に大いに期待したいです。



ZOOっとタイムズ ● No.6

まんが:かわかみひろし



動物科学資料館10周年

～この10年を振り返って～

1987年(昭和62年)3月21日、動物科学資料館がオープンして、今年で10年になります。開館以来、440万人以上の方々にご利用していただき、動物園の教育普及の場として、定着してまいりました。

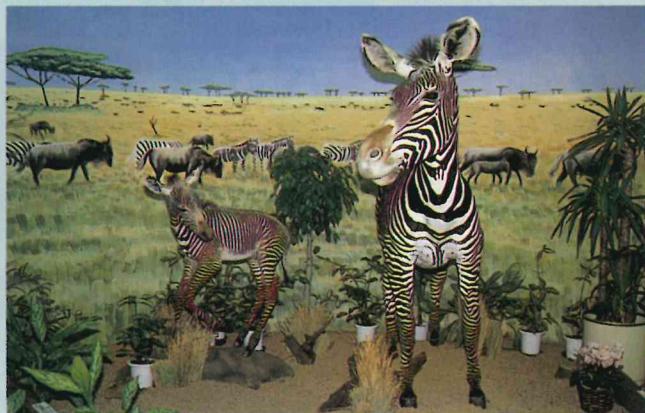
展示物の中でもっとも人気のあったのは、自転車に乗って動物と競争する「アニマルレース」で、順番待ちの子どもの長い列ができるほどでした。

また、子供はなぜかウンチが大好き。大型トイレをのぞくと、次々に動物の糞のスライドが出てくる「アニマルトイレ」は人気上々でした。

本物そっくりに作られた「ゴリラの森」の前では、怖がって泣き出す子どもが続出。子どもたちにはちょっと気の毒でしたが、いかに臨場感あふれる展示物であるかを証明してくれました。

一方、特別展は年間4～5回のペースで開催してきました。「熱帯雨林の世界」、「ウォッティング」、「ウマ・うま・馬」など、今まで40回以上の展示替えをし、常にあたらしい風を送り込んでいました。

また、手探りで始めた催し物もすっかり定着し、映画会をはじめ、七夕やクリスマスの催し、動物クイズ、ガイドなど、来館者に楽しく参加していただいています。特に、夏休みに開く動物絵画教室は、年々応募者も増え、なかなか好評です。



特別展「ウマ・うま・馬」展

図書室、ビデオコーナーも資料が増え、子どもだけでなく、大人にも幅広く活用していただいている。

今後、さらに楽しく動物のことを学べる施設として充実させて、より多くの人に利用していただけるよう努めたいと思います。



「アニマルレース」



「ゴリラの森」



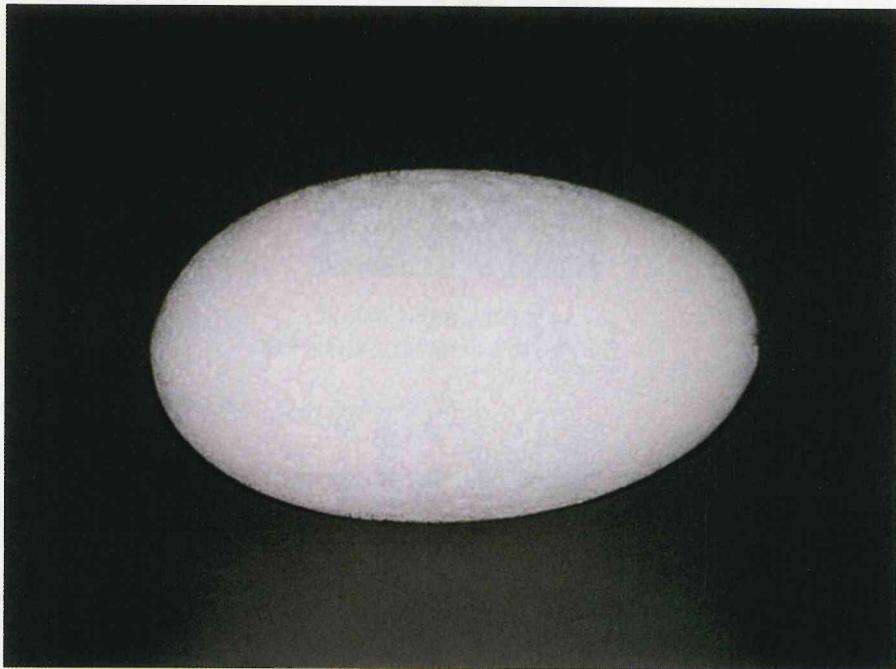
特別展 ウォッティング ～こんなにもいた日本の動物たち～

特別展「神戸の動植物園展」開催中

1997年3月20日～6月30日

神戸市内にある自然を展示する市立の動植物園などの特徴や見どころを楽しく紹介します。

参加園：須磨離宮公園、須磨海浜水族園、六甲山牧場、森林植物園、布引ハーブ園、王子動物園



メガネカイマンの卵(原寸大)

表紙動物の解説

メガネカイマン

Spectaled Caiman



メキシコ南部からアマゾン流域に広く分布するこの種は、以前ペットとして売られていたこともあります。しかし、こういったペット化のため、野生では絶滅の危機に瀕するようになっています。動くおもちゃ感覚で飼われては、死なせてしまうのがほとんどです。運よく育つと(?) ペットの大きさを軽く超え、動物園や水族館に引き取ってもらおうとご都合主義になり、最悪は野池などに捨ててしまう、といったことになるようです。ワニに限らず、野生動物は動物園や水族館をご覧ください。決して、ペットとして長い付き合いはできないのですから。ちなみに、このカイマン君は、週に一度ブロイラーを一羽ペロリと平らげ、飼育係にまで飛びついてきますが、同居の魚たちとは仲良しです。



はばたき40号

平成9(1997)年3月20日

編集: 神戸市立王子動物園

TEL 078-861-5624

発行: 財神戸市公園緑化協会

TEL 078-801-5711

神戸市灘区王子町3丁目1

デザイン・印刷:

神戸オール出版印刷㈱

TEL 078-671-5016

定価200円